

Unique &  
Exciting

キャリア編

杉崎 智介

2019年博士後期課程基盤理工学専攻入学  
映画監督

# 電通大研究室から 世界の映画祭へ挑戦!!

子供の頃から遺跡や古建築が好きで、埋蔵金探しも随分して来ました。生まれは厳しい環境で、父は家に生活費を入れず、母は酒浸り。小学校時代から「どうやってお金を作るか」が私の課題でした。古銭を旧家や果樹園でしばしば発見し、郷土新聞に「埋蔵金少年」と取り上げられたのはこの環境からでした。古銭は高く売れました。当時はコインブームでしたから。中学校時代は雀荘でアルバイトをしていました。深夜12時閉店後、店内清掃をします。二人分の仕事量を一人でやり日給が5千円でした。公務員の初任給が6万円少しの時代ですから、月に12万円、現在に換算すると40万円程。これは全て家に入れました。その内店主から賄いを頼まれました。当時は店が混みだす夜8時には出前は終わってしまうため店主は困っていたのです。「材料持ち込みで売上は全部取り」という条件で、焼うどんを毎日30食提供することになりました。30食なら絶対に売り切れるからです。1食千円で、1日3万円、月に60万円です。今の180万円程ですがこれは家には内緒。この売上や古銭を売ったお金で高校時代から株式投資を始めました。興味のある会社の株を買っていき、幾つかの上場企業の大株主となり人脈も広がり、気付くと実業家になっていました。ところで、小学校時代の私の部屋は階段下の物入れ、日常の抛り所はラジオ。小学一年生の頃、毎日が辛くて「ぼくをラジオの中に連

れて行って」と何度か番組にハガキを出しました。涙で擦れた鉛筆文字は読まれることはなかったのですが、40年後その話がたまたまラジオ局での席で出て、それがきっかけでラジオの世界に。

一方、学問好きを我慢して来たので、寝る時間を削り仕事の隙間を探し、大学の建築学科に入学。その後も時間を作り、数学科、物理学科を卒業。物理学科の卒論は「ホログラフィック原理」でした。内容は「この世界が仮想空間であることを数学で証明する」というもので、物理をもっと学びたくて電通大に進学しました。当初は物理系の渡辺信一先生の研究室に入る予定でしたが、先生の定年に掛かり、瀧真清先生の研究室所属となったのです。それが生物物理学との出会いです。数学科物理畑の人間が生物化学系研究室に配属され、それも少しでも物理



ラジオパーソナリティーの放送中。20年来の仕事



映画『精霊』ポスター



「作品賞」受賞



「主演女優賞」受賞

にとどまりたい欲求から不慣れなMD法（分子動力学計算）を自分でソフトを買って進めることの無謀さを感じていただけの方も、電通大学生さんやOB・OGの方ならいらっしやるかもしれません（笑）。研究は創業に関するものですが、3年間にわたって連日、東大のスパコンSHIROKANEを動かしている間に興味を持ったのが「プラズマ生命体」です。2007年にドイツのマックス・プランク宇宙物理学研究所による発見は周知です。さて、当初目的としていた創業の論文は仕上げたものの、私の興味はどうにもプラズマ生命体から離れず、日を追うごとに深まるばかり。しかし、それを査読論文にするわけにもいかず、脚本を起こし映画にしたのが2025年に公開された映画『精

霊』です。海外版は『Spirits』という題名で、国内上映されたものとは内容が少し異なりますが、ありがたいことにこちらが現在世界で評判をいただき、アメリカ、カナダ、フランス、スペインなどの国際映画祭でノミネートされ、アメリカの映画祭では「作品賞」、「主演女優賞」もいただきました。因みに映画『Spirits』の監督は私ですが、主演は電通大で研究生として籍を置き一緒に学んだReeSy（長本梨沙）という女優です。少々拡大解釈すれば、電通大研究室から「プラズマ生命体」で世界を獲ったと。脚本家ならではの少々大げさな物言いを見せていただきました（汗）。話が長くなりましたがこの映画を一言で説明しますと、「物語や伝説、伝承に登場する精霊とはプラズマ生命体だっ

た」という御伽噺です。アメリカを始め海外で映画が上映され逆輸入という形で日本の劇場に登場する機会があれば、皆さんにぜひご覧いただきたいと切に願っております。最後にありますが一言。学問の道は険しく厳しく、研究を続けることは容易なことではありません。それを人生にするなら尚更。自分の研究が世の技術や人の暮らしに役立つならそんなHappyなことはありませんが、それは極一握りでしょう。私は数学や理科は好きだから続けられると思っっています。必ずしも論文が全てでもないはず。あまり思いつめると病みますから自由な発想で世界を見つめるのもありかもしれませんよ。歩く道端に何かが転がっていることも…。